

話^わじやれ (24)

岐久 ようこ

あの人が皇帝？

自らを皇帝と名のり

「わが国の初代皇帝」だと

内外にアピールした

中央アフリカ共和国の

ボカサ大統領です

1977年に多額の国家予算をつぎ込み

豪華な戴冠式

「派手すぎる！」

目を反らすことも出来ず

独裁が続き歯ぎしりを強いられ

「風よ。あの王冠を吹き飛ばせ！」

2年後に失脚しました

ヤタラ印ろうを振りかざす人

コロナ渦にあっても

「我国の感染者はゼロです」

調子のよい発表の大統領もいて

すぐ訂正することになるが

印ろうを振り回せたのは
随分と昔やないか

服にも 頭にも着けた ムダ飾り
突風よ イバル鼻つつら へし曲げ！



競泳のエース

不滅の記録の数々

輝かしい過去の栄冠

「リカコ！」の声援がとぶ

池江選手は

体を壊しベットに横たわる

「腹くくって入院したからには

どんな事があっても

苦しい闘病に打ち勝つぞ！」

そうでない

と 専任のコーチが付いて

努力した意味がない

「できるかなあ」本当の気持ち

「笑顔でいなきゃ」素顔は

隠し自分の声で言ってみる

「どうか神様、仏さま」

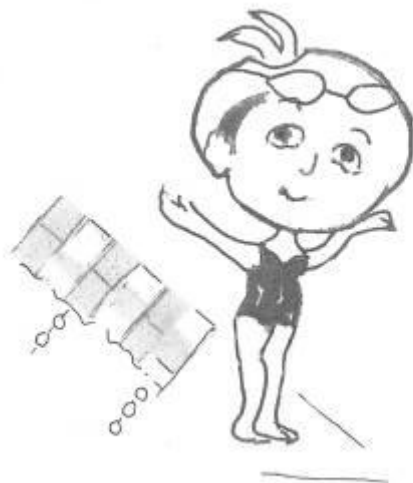
祈ったでしょう

まだ二十才

プール脇に

両足で立ってる

悔しさを 含めてシブキ 100%
五輪 1年おくれを 這い上がる



西部警察がハマリ役

この道に入って5年目
俳優としてやっていけるかどうかの頃
撮影所での新しい出会い
渡哲也さんから

「館ひろしさんですか」

丁寧な挨拶をうけて

そこから「石原軍団」の

一員となって45年

ある日。ロケ現場からの

バスの中で突然に綿棒だして

「ひろし、綿棒オマエもいるか？」

耳を綿棒で二人は掻きながら

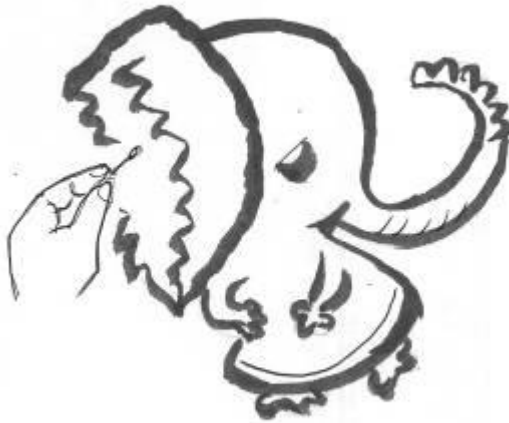
そのうち

「アフリカの象さんは耳がカユイ時
どうするんだろう」

先輩とはいつもカユイ仲間だった

カユイ所に手が届く人だった

今度 「館^{たち}プロ」を 立上げた
先輩よ サングラスの向こうで 見守れ



喋りだしたクチナシ

春は沈丁花

初夏は香りの

クチナシ

秋になり金木犀が咲き終わると

話のタネが蒔かれだす

現ナマ持ったナメクジから

「これ、親分から」と

渡されると断れず

あっちこっちで

「クチナシが開花」

まず「もらった」と認めたのが

広島は三原市長さん

200万受け取った県会議員さん

の心の内は

「墓場まで持っていける額かな」

30万の女性後援会長さん

「開けて見てガッカリ」

投票するけど

これだけでは足りやせん

「まあ、いいか」

残ってる はえずり回った 足跡
アレ 軽そうなのは 消えそうだ

